インターンシップ体験記

学生が企業や官公庁、非営利団体などで一定期間就業体験を行うインターンシップ。近年では内容や期間も多様化している。ここでは昨年度、特色あるインターンシップに参加した学生の体験談を紹介する。

選手のキャリア形成学ぶ

斉藤　早矢（文4）

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて文部科学省（スポーツ庁）が最重要拠点としているのがJSCハイパフォーマンスセンター（東京都北区）のハイパフォーマンス戦略部。競技団体に強化策を積極的に提言する同機関にインターンシップをした文学部人文・ジャーナリズム学科4年次の斉藤早矢さん（山田健太ゼミ）から体験記が届いた。

◇　◇

私が就業体験したJSCハイパフォーマンスセンターは、母体である日本スポーツ振興センターの国際競技力向上や競技研究などを行っている国の機関です。

私は現在、レスリング部のマネジャーをしており、清水聖志人コーチ（文学部非常勤講師）のお手伝いでこの機関に何度か訪れる機会がありました。女性アスリート支援やキャリア支援などの取り組みを行っていることを知り、もっと詳しく勉強してみたいと思いました。

日本スポーツ振興センターに出向し国立スポーツ科学センター副センター長およびハイパフォーマンス戦略部長を務めている久木留毅レスリング部監督（文学部教授）の尽力により、2月6日から同部で11日間のインターンシップが実現しました。専大生の参加は初めてです。

インターンシップ期間中は主に女性指導者勉強会の運営業務や、中学校のスポーツ選手に対して行ったキャリア形成のアンケートの集計や、ハイパフォーマンスセンターと競技団体との連絡をシステム化するための打ち合わせに参加しました。ついていくことができるのか不安でしたが、事前勉強をしたことで、打ち合わせの内容もよく理解することができました。

また、アンケートの集計では、若いうちから選手時代と引退後の自分を考える必要があることを知りました。デュアルキャリア（人として、アスリートとして同時にキャリア形成を考える）は、早い時期から浸透させるべきだと感じました。これらを成果として、最終日に発表しました。

これまで日本スポーツ振興センターはトップ選手が練習する場、計測などの結果を選手に還元する場などと思っていましたが、仕事を通じてスポーツ界におけるこの機関の役割などの本質的な部分を知ることができた貴重な体験となりました。

インターンシップの成果を発表

コンサルティング企業の戦略立案コンテスト
最優秀賞受賞し海外研修

相田　真弥（商3）

昨年12月、商学部髙橋義仁ゼミ4年次の石井美沙祈さんと私、一橋大学生、同大学院生の計5人の研究チームは、株式会社エスネットワークス（es社）のIPO（新規上場）インターンシップコンテストで最優秀賞を受賞し、今年2月には副賞として、3日間のシンガポール研修に招待参加させていただきました。

es社は企業支援を行うコンサルティング企業です。同社に入社が内定していた商学部の先輩から、髙橋先生を通じてコンテストへの誘いがあり、応募したものです。

コンテストでは、事前課題として、「架空の外食チェーンの成長戦略プラン」提出、次いで面接選考を経て最終選考会への参加資格が与えられます。

最終選考会に残ったグループは3日間のインターンシップに参加できます。インターン期間中、同社の方々から事業計画書の基本的な考え方や書き方、また、資本政策、企業価値評価手法の基本などの講義を受けました。

私たちは、インターン設定日以外にも時間を見つけては集まり、課題解決に取り組みました。提案内容には企業価値評価や持ち株比率の設計なども含まれており、会計について深い知識がないと提案できない、かなり厳しい内容でした。当時2年次生の私にとっては相当にチャレンジングな内容でしたが、チームに貢献するために必死で勉強し、ついていきました。

最終選考会最終日には、「架空外食チェーンの成長戦略立案」のプレゼンテーションを行いました。私たちは最優秀賞を受賞することができ、2月12日からのシンガポール研修旅行に招待されました。

es社の現地子会社やシンガポール銀行を訪問し、シンガポールが世界経済に与える影響力や役割、日本との取引について学ぶことができました。国際的な経営に英語が道具レベルで不可欠であることを身に染みて体験しました。

そのほか、総合リゾート施設として名高い「マリーナベイ・サンズ」などにも連れて行っていただき、非常に充実した3日間を経験しました。

自分で考え、企画するといったアウトプットの作業は講義を受けるだけではなかなか得ることができません。知識の実用性を確認するような学びの方法は、自分から飛び出してつかんでいかなければ得難いものであることを実体験しました。その意味で今回の体験は貴重なものとなりました。

海外を見て身体で感じ、知ったことを、グローバルビジネスを学んでいくうえで生かしていきたいと思います。アウトプットの学習をゼミで学ぶことが非常に重要であることを意識するようにもなりました。

相田さん（右から3人目）と石井さん（同4人目）

商・鹿住ゼミ生考案
「春のひだまり弁当」を販売

商学部・鹿住倫世ゼミ生6人が春をテーマに考案した弁当が、京急ストア（本社・東京都港区）で商品化された。3月17日から4月9日まで、予定を上回る約7000個を売り上げた。

その名も「春のひだまり弁当」。考案したチームの代表の上村明日実さん（4年次）は「商品化されてうれしい。たくさんの春の要素を詰め込んだので、味やきれいな彩りから春を感じてもらえたのでは」と話している。

昨年の第13回神奈川産学チャレンジプログラム（神奈川経済同友会主催）で同社が提示した「春のお弁当をプロデュース」というテーマに対し、鹿住ゼミチームが最優秀賞を受賞。商品化が実現した。

ゼミ生は減塩、低カロリー、そして地元神奈川県産の食材にこだわった。商品化にあたってもコンセプトはそのまま、「三崎まぐろのビーンズサラダ」「やまゆりポーク豚しゃぶ生姜ソース」「県産キャベツ土佐酢のジュレ」などのメニューが並んだ。1食477キロカロリー、塩分も3・3グラムに抑え、体にやさしい弁当になり、花見客らが購入していた。

京急ストアで販売された鹿住ゼミ生考案の弁当

日経STOCK 4年連続の入選

商・渡邊ゼミ

商学部・渡邊隆彦ゼミのチームが、株式学習コンテスト「第17回日経STOCKリーグ」（日本経済新聞社主催）に入選した。渡邊ゼミからは毎年複数のチームが参加しており、入選は4年連続。

メンバーは現4年次生の遠入弘菜さん、神保茉美さん、持村浩嗣さんと現3年次生の河西桃子さん、佐藤雄斗さん。経済成長が活発なASEAN諸国に注目し、積極的に進出している花王、堀場製作所、ピジョンなど14社を投資先に選んだ。

「ASEANのニーズに対応しているか、海外進出に積極的か、技術水準がジャパン・クオリティーといえるか、三つの観点で点数化した。自分たちの基準を示せたことがよかったと思う」と遠入さんは話す。「後輩が臆せず意見を出せる雰囲気が大事」（神保さん）と情報を共有し、下調べもリポート作成も全員で分担した。

株を模擬売買する時期は米国の大統領選と重なり、持村さんは「株価に大きく影響することを実感した」。初めて知る社名も多く、3年次の2人は「知名度だけでなく多角的に企業を研究する視点を学んだ」（佐藤さん）、「今までと違う株式の見方を養えた」（河西さん）と手応えを得た様子。「来年こそ入選からさらに上位へ」と意気込んでいる。

日経STOCKリーグは中学生～大学生が対象。参加チームは独自にテーマを決め、投資する10～20社の組み合わせを考え、論文にまとめる。応募全1618チーム（258校）から最優秀賞と審査員特別賞を選出。中学・高校・大学の部門別に優秀賞、敢闘賞、入選が決まった。大学部門（128大学627チーム）では44チームが入選した。

賞状を手に笑顔のメンバー

外国語のススメ
外国語教育研究室

— 55 —

中国語

松原　朗　文学部教授

短期留学のすすめ

外国語の学習で何が跳躍台になるのか？　人それぞれの答えがあろうが、一度はだまされたと思って、国際交流センターが主催する春期や夏期の短期留学に参加してみることだ。私自身は、過去に春期留学プログラムの上海大学と西北大学（現在は上海大学のみで実施）の語学研修を何回か引率したことがあるので、その効果のほどはよく分かっているつもりだ。

中国の短期留学の場合、午前中に50分×4回の授業が組まれていて、午後は自由時間となる。学生は少し自信がついてくると、バスや地下鉄に乗って街中に繰り出し、見聞を広める。大学の教室では、試験の成績や検定の合格を目標に努力を重ねるのだが、このような絵空事の世界の「涙ぐましい努力」は長続きするものではない。一方、中国語を話す「現場」では、学んだ成果がただちに相手の反応となって戻ってくるので、嬉しくて学習に身が入る。思うように通じなければ、悔しくて学習に身が入る。こうした生々しい感触が、外国語の学習には大事である。またその中から、学生たちは身をもって異文化交流の意義を汲み取るのである。

旅行は、通りすがりの立場で外から相手を眺める。留学は、自分を相手の流儀に合わせて生活する。この違いは思いの外深刻で、短期留学に参加した学生は、まるで別人のようになって帰国し、黙っていても何割かが中期や長期の留学を志すようになる。短期といえども留学生活は、それほどに刺激的で魅力的なのである。これを知らずにおれようか。※短縮版。全文はCALL教室ホームページで

上海大学のキャンパス